

はじめに——「古代史」における天文研究の歪み

### ①研究の農本主義的傾向

服部中庸「三大考」「外国には星を日月にならべて、いみじき物にすれども皇国の古伝には星の事なし。ただ書紀に、星神香々背男と云、微き神名の見えたるのみ也。日月とならべてことごとしく云べき物にはあらず」

芳賀矢一『国文学十講』「農業国で昼の疲れに早寝をするので、天体のことには注意が少なかった」

加藤玄智『神道の宗教発達の研究』「日本人の文化は、夙に農耕期に入っておったため、アラビアの砂漠に永く遊牧生活を営み、夜間涼を逐って星光を頼りに移住し行く遊牧民の間にみるが如き星辰崇拜は、日本に起こる理由がなく、またその必要をみなかった」(一九三四)

津田左右吉「農業と日の関係が知られるほどに文化が進んでくれば、農業国民たるわれわれの祖先は、この意味からでも日を神として崇拜したであろう」、しかし「上代人は、全体に天界の現象には注意しなかったらしい。(中略)一般に知識の程度が低かったからであることは勿論ながら、それに注意が向けられなかったことも疑いがない」と述べている。

### ②神話論的認識の低調

天は日照(太陽)のみで理解していた。神話学では倭国神話の司令神はタカミムスヒ。

「原始的」神道から儒教と仏教へ(麿仏神道から崇仏へ)という単線的な思想史。

津田「蒼天をかざる美しい星の如き」も日本神話には現れず、そもそも天体の「行動や働き」を示す「自然説話」自身が日本の神話にはない。

記紀神話の性格と政治性が星知識の軽視を結果。宇宙創成神話の不在＝星の神話の不在という偏見。人々の星の知識を神話的思考を交えて確保していたのは自明。

### ①天文学的認識の進展

602年百濟僧観勒、暦・天文・地理。遁甲などの書将来。七世紀は天体観察の大規模化・本格化の時代。

推古から天武までの間で二五件の天文記事(『日本書紀』)舒明の段階での星食の記録。天体観察の専門家の存在。

国土の空間分割、編成の稠密化に対応して展開した非常にダイナミックな過程。

火山列島と海洋性気候という条件の下で、蓄積されてきた民俗的自然認識が再編成される。岩盤性の天という認識にもとづく天界史料はむしろ多い。噴火・隕石などへの認識と合わせて広く見る必要。

### ②道教思想の拡大

七世紀、敏達・(孫)舒明(？)・(妻)斉明・天智・天武は道教趣味。

天皇号は道教は通説。しかし「日本の神道」という思い込みのまま、それが道教を内容とすることを無視(上田正昭)。

### ③学際的研究の必要

考古天文学的研究の決定的意義

勝俣隆『星座で読み解く日本神話』のような神話を天界にマップ化する試みの客観性をどう担保するか。

神話論は聞き流し、星に関係する部分のみを聞いて下さい。

## ―天蓋・星・噴火・雷

### 1至上神(雷神)タカミムスヒ

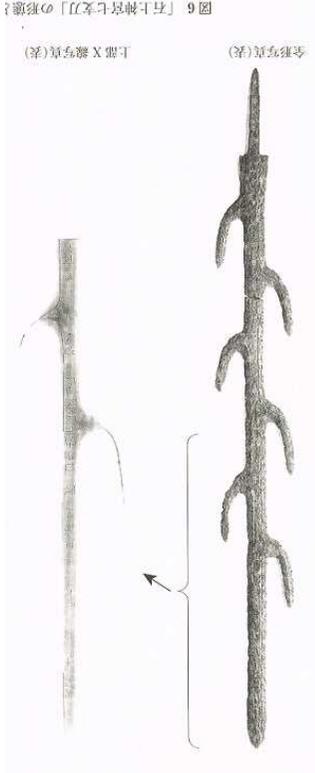
### ①雷神タカミムスヒ

タカミムスヒの持物としての「羽羽矢」(雷電矢) タカミムスヒの降す剣。雷電劍

「十握劍」を逆さまに突き立て、その鋒端に座す神(義江明子『古代王権論』)



天球の外からみた図。この穴から稲妻を発する。 同じ画像が「呉竹鞘杖刀」(正倉院)、四天王寺蔵 七星劍にあり(福永『道教思想史研究』49、50頁。 成田市稲荷山鉄劍の象嵌は地上から見た図(日高 慎『博古研究 35号)])



「稲妻形」(私説)の石上七支刀

金象嵌線が入っている

柳田国男「我々の天つ神は、紫電金線の光をもって降り臨み、龍蛇の形をもって此世に留まりたまふものと考えられていた」

### ②天空に星の穴を開ける神

「羽羽矢」を投げ下ろし、天蓋に穴を開ける。穴には厚さがあり、それゆえに星を筒という(勝俣)。磐筒男(イザナキ)

### ③火山神タカミムスヒ

阿閉臣事代、命を銜けて、出でて任那に使う。是に、月神、人に著りて謂りて曰く、「我が祖高皇産靈、預ひて天地を鍛造する功有り。民地をもつて、我・月神に奉れ。若し請の依に我に献らば、福慶あらむ」とのたまふ。日神、人に著りて阿閉臣事代に謂りて曰く、「磐余の田をもつて我が祖高皇産靈に献れ」とのたまふ。事代、便ち奏す。神の乞の依に田十四町を献る。对馬下県直、祀に待ふ(『書紀』顕宗紀三年二月朔日条、四月朔日条)

### 「天地鍛造」とは何か

「天地鍛造」の「鍛」。文選39巻。保立『現代語訳老子』(ちくま新書) 283 頁参照・中国の宇宙観。「日継ぎ＝王の雷性の継受」

### ④雷神トの神＝王は雷によって孕む(漢、劉邦)

『日本霊異記』雄略の雷神と性交

### 2至上神(竈神)カミムスヒ

### ①カミムスヒ＝竈神説(中村啓信『古事記の本性』)

神名はカミムスヒが先行。ウムスヒ＝蒸す霊＝竈霊 この神名を前提に従来から国家神であった(雷神)にタカミムスヒという名前がついた。

### ②カミムスヒは火山神

イザナミの国生は火山噴火(松村武雄) 竈は女性の「性器」の象徴。

五世紀後半から六世紀、(朝鮮半島から馬とともに)長胴釜の竈が全国に普及。 竈を中心に人口をみる考え方。 竈人(ヘヒト＝食封)。人制の一つ

### 新しい神＝ムスヒ



竈神は人間の胎内の虫(三尸)を統括する神。「老婦」最初に炊爨を行った女性祖神「この虫が上天の司命神に人間の悪行を報告する。」

司命神(男)は道教の北極の神。人間の生命を管理。竈神(女)はその配下の小神。中村喬「竈神と竈の祭について」(『中国歳時史の研究』)

祈禱の占い(厳釜で)「水無しに飴を作らむ」←成就。飴の意味がこれまで不明であった。

竈神に飴(「膠牙飴」)を賄賂とす。『荆楚歳時記』では元旦の節物(唐代)。竈神が天に密告しないように、甘い物を食べさせ、歯をくつつける。

右の史料は時期は降るが、中国では古くから「飴をもつて釜に沃ぐ」(『晋書』石崇伝)ということが富貴の象徴。この種の言説が、誤解もふくめて倭国に紛れ込んだ可能性は認めてよい。司命・竈神の觀念の伝来。

### ④雷気のみとい付くイワレヒコ司命神

イワレヒコ、雷気のある材料で作った「飯」を食べて出撃火(「嚴誓味雷」、水「嚴罔象女」、粮「嚴稻魂女」、薪「嚴山雷」、草「嚴野椎」。全て「雷」と関わる。

一〇日近くは忌籠(神がかり)の後に、磐余との境で戦闘、忍坂にキャンプ。

カミムスヒ・タカミムスヒ 竈神・司命神 司命。北極星座に属すると觀念。

「寿を主る」(『晋書』天文志)

大司命は天門から出て玄雲に乗って雨を注ぎ、龍車の轟音を響かせるといふ一節の注に「司命は星の名、生死を主知す」(『楚辞』九歌第二)

「天地に過を司るの神有り」(三尸という身中の虫が)庚申の日に到る毎に輒ち天に上りて司命に白げ、人の為す所の過失を道る。「月晦の夜に竈神もまた天に上りて人の罪状を白す」(『抱朴子』(卷六微旨))

### ⑧司命神とクヒザモチ(北斗七星? 水神)

タカミムスヒを司命にあてるとすると、タカミムスヒが北極星座の一部を構成しているという觀念は古くさかのぼることになる。

イザナミが神生みで生んだ水界の神々。

海神 大綿津見神、

水戸神(河口や湾口の神) 速秋津日子神・比売神

水戸神の生んだ神

(一)沫那藝(あわなぎ)の神・沫那美(あわなみ)の神、(二)類那藝(つらなぎ)の神・類那美(つらなみ)の神。(三)天の水分(みくまり)の神・國の水分の神。(四)天の久比奢母智神・國の久比奢母智神。

### 本居宣長説 汲瓢持 ← 韓国語、柄杓クツチャ?

鎮火祭祝詞にイザナミがカグツチの後に鎮火のために地上に戻ってきて「水神・瓢・川菜・埴山姫」を生んだとみえる。瓢にあたるか。

天地の久比奢母智神(男と女か。モチは尊貴存在を示す接尾語)ヒサモチ(瓢貴) 水神

オオナモチ、ウケモチ、オオヒルメムチ

柄杓持ちの女(甲塚古墳の埴輪)



甲塚古墳(下野国)の埴輪

### 3 タカミムスヒと日記部・私部

敏達575年他田幸玉宮に「日記部・私部」設置

### 1 日記部の研究史と私説

(イ)太陽(タカミムスヒ日神) 祭(岡田精司、溝口睦子)

(ロ)王家祖先神祭(早川万年)。

「日記」は漢書からとった表現で「毎日祖先祭」の意で太陽の意味ではない。

(ハ)王に奉える部(永田一)。日記は漢書による潤色。史料表現は日奉。「奉」は仕える意。…王奉仕部

雷神タカミムスヒの「日」ヒ。「日記」は漢書の摸倣としても「ヒ」には日継の血統の意味。

「奉」まつるは「政」に同じ。雑事全般の処理。全体の統括。(成沢『政治のことば』。仕えるは無理。「日記」日奉 日政)

### 2 日置部

上田正昭説、日記部に先行して西国に置かれた宗教的手工業部(井上光貞のいう火・油はあったとしても後の変化)

三浦茂久説、応神記「幣岐君」の幣を音借とともに正字ととして、幣のヒレ置の意とする(『月信仰と再生思想』)

「寧楽の手向に置く幣は『万葉集』③ 300、石田の社に幣置かば」⑨ 173、「夕トを問ふと幣に置く」⑩ 2625、「相坂山に幣取り置きて」⑬ 3237、「神に幣置き」⑭ 4426。

結論、(麻・絹の)幣を作り、山野などに捧げ祈る部民。五色の絹、幣は道教的なもの。

「名山に入るには五色の絹各おの五寸を以て大石の上に懸くれば、求むる所必ず得らる」(『抱朴子』登涉篇。福永「古代日本と五色の薄絹および五色の幡」『道教と古代日本』)

### 3 伊勢の日祈神事

伊勢の日祈は四・六・七・八。「悪風雨の吹かざらんがため」「旱災(停止)」「風雨災鎮」の祈禱。これは雷神への祈禱であろう。

実際の負担は幣帛のための蚕糸、麻などになっている。

### 4 私部は絹織維生産管理の部

(イ)日奉部の負担で判明は土佐の日奉の調繩のみ  
(ロ)織姫信仰としてのアマテラス(アマテラスが口に繭を含むところから養蚕は始まった。昆虫食から養蚕へ)  
(ハ)妃の蚕生産への関与(史料多し)

日祀部(財)日奉部へ、敏達王統女系で日奉部は伝領され、タカラ姫(皇極日祈)段階で統合される。光明皇后の女官たちに日奉氏が集中

### 5 結論、雷神+北斗+王家血統神タカミムスヒの祭政組織

『延喜式』臨時祭条のトップ。

内裏には宇奈太理坐高御魂神社と八神殿(トップはカミムスヒ)が並ぶが、落雷と竈鳴りの際は五色のヒレ繩を振る。この組織の原型が形成された。

日置氏が西国におかれたのに対して王権の前進基地である辺境を中心設定されたか。きわめて政治的な組織であった、その意味では調製の原型ともなったか。「日奉連 高魂命之後也」(『新撰姓氏録』左京、神別中)

### 4 「スメラミコト、スメロキ」号の成立?

スメラは「澄心」(西郷信綱『神話と国家』)

「アメキミ」より新しいか。正規の称号である。私見では道教(仏教)の清浄性の論理の影響。西郷は「和」的なものとする

### III 齊明と天武の道教国家化

#### と天御中主(七世紀30年代以降)

### 1 齊明・天武の道教撰取と天皇号

七世紀天文記事のベースにあったもの。

### ① 舒明妻、齊明は「古道」(道教)を尊重。

齊明の夫の舒明の道教への態度は不明。しかし、百濟大寺・舒明陵は磐余にあり、タカミムスヒとイワレヒ

コ神話の組織者ではあつたらう。

齊明。七世紀は齊明一天智・天武の母子王朝期  
飛鳥に天宮、道観と酒船石（日没観測台、真西から北  
へ13度ずれる。齊藤国治『飛鳥時代の天文学』一第  
の孝徳は「神道を嫌い、儒教」。大化改新の対立点。

## ②天武の道教と天文知識

近江内戦蜂起の時、自分で式を立てた。天文の専門知識（兄の天智は時間制度、漏刻の設置）  
占星台設置（675年）、

益田磐船設置（日没観測台、13度ズレ、齊藤）

## ③天皇号と八色姓——本格的道教国家への動き

天皇号の制度的確立は天武期（吉村武彦『古代天皇の誕生』）

天皇は昊天上帝⇨天皇大帝⇨北極星を意味する道教思想（福永光司「昊天上帝と天皇大帝と元始天尊」）

八色姓、真人（道教のいう神人、道師を含む。道教的国家身分制の構築。真人は王族（いわゆる皇親制の内実）。律令制や仏教化の単線では七世紀国家思想は解けない。）

## 2 『古事記』と天御中主・天照大神

建国神としてのムスヒ神の相対化。北極星信仰のアノミナカヌシとしての中枢化

## ①天御中主⇨北極星。天皇に対応する神格。

六朝期の枕中書に「天の中心にいる元始大王が北極星の神格をもつ。その影響（飯島忠夫説、著書未確認）」

「天地初めて発りし時、高天原に成りませる神の名は、天御中主神、高御産巢日神、神産巢日神。この三柱の神は、みな独神と成りまして、身を隠したまひき」『古事記』本文冒頭）

倭国神話の道教化の完成。タカミムスヒは『古事記』では冒頭の造化三神の二番目となる。

②女仙としての天照大神・豊受・かぐや姫  
ムスヒ二神は上からはアマノミナカヌシ、下からは道教的な女仙としての天照大神・豊受姫（広瀬）によって相対化される。

## タカミムスヒ+スメラミコト

——⇨アマノミナカヌシ+天皇

## 3 ハレー彗星と南海トラフ大地震

## ①天武一三年7月23日（684）ハレー彗星

天武一三年二月21日（685）もう一つの彗星（瓮の如し）、大流星群をもたらす。

## ②天武一三年10月14日（684）南海トラフ大地震。

地震。

## ③八色の姓発令、真人設定10月1日（685）

朝臣設定二月一日、宿禰設定12月一日  
一一一四年九月、天皇不序

## おわりに——古墳と道教

## 1 「北枕の思想」と道教

北條『古墳の方位と太陽』  
埋葬頭位における「北枕の思想」は都出では儒教の影響という指摘で終わっていたが、北條はそこに「北辰信仰」の影響を実証した。これが前方後円墳とともに古墳時代に列島に広がったという。「これは同時期のさまざまな遺跡や遺構を対象に、かつ具体的な情景描写とともに天体運行との関係や方位を検討することができる」。

私見ではこれは（韓国を通じての）東アジア道教の展開の最大の指標となる。

## 2 壺型墳と道教



三品彰英の前方後円墳⇨壺型墳説

前方後円という異形の高塚古墳も巨大な一つの『壺』であり、またその石室の周囲に死者の御霊を護るがごとくに埋めてあるのも、これまた『壺』であります」（三品「前方後円墳」『三品彰英論文集』第五巻）。

岡田精司『神社の古代史』（二五六頁）の意見。

『万葉集』の齋瓮は「古い形式の古墳では埴輪の原型にあたるものとして、壺を並べている例がある」。

保立「火山信仰と前方後円墳」

東海に（有名な蓬萊のほか）、壺型の山島があるという幻想。「方壺」という島（『列子』湯問篇）。

形成期の前方後円墳、箸墓古墳や吉備の古墳などの「壺」

「特殊壺・器台」と呼ばれるもの。

「厳瓮」——「特殊壺」

「平瓮」——「特殊器台」

「厳瓮・平瓮」を「置物」（『日本書紀』）

「八十平瓮」は高さがあって上端部が平なもの。器台

二二年、伊勢神宮正殿の床下の「天平賀十九口」が「倒れ臥し」、「三口」が「居ながら破損」鳥の所為か（『神宮雜例集』）

平瓮「供神物を盛るの土器なり。今の世、伊勢太神宮の御殿の下に多くもって安置す。或説、諸神参候の神座云々」（『釈日本紀』巻九）

王家神社、伊勢神宮正殿は壺の並ぶ（古墳の）上に床を張った壺社もの。

王家氏寺、東大寺は当初「金鍾寺」

壺は本質的な問題として神話時代から引き継がれるが、根本にあったのは東アジア。

継がれるが、根本にあったのは東アジア。

## 付。測量問題

日常性は東西。一通の野原の中分状がによれば、「二・八月の日巳の出入りをもって」東西に野原を中分したということにも示されている（『鎌倉遺文』⑧6135）。

直線の引き方とノロシ

建長八年讃岐国柞田莊四至傍示注文（『鎌倉遺文』⑩八〇二五）。

同莊は、北を坂本郷、東を紀伊郷と姫江莊、南を姫江庄、

西を瀬戸内海によって堺された莊園。

北の坂本郷との境界地帯は田地。そこに直線に堺を通すにあたって狼煙を使った測量

まず北東——良（北東）の傍示」が莊園の北東の端に打たれた。そこは北の坂本郷、西の紀伊郷、山本郷（この郷は坂本郷の東、紀伊郷の北（つまり柞田莊の北東）に存在した）と柞田莊をつなぐ道の「四辻」

次に「良の傍示の本」と（莊園の北西端に残る）「古作の

畷の末」の間に、「連々と火煙を立て、その通りを追って、

その堺を紀（糺？）し」、その西端に北西の傍示——「乾」

の傍示を打ったというのである。

ここで直線的に見通せるように、境界に立ち上げた煙を目当てとして縄をのばしていくという方法がとられたことは、「畷」とあることからわかる。

こうして、柞田莊とその北の坂本郷の間の境界は、「北は坂本郷と堺を限る、両方ともに田地なり、その堺に東西

行の畷をまさに通す」という景観が生まれた。

「子午畔」